

水木さんとは、30年ほど前、雑誌の企画で対談してから、親しくおつきあいしていただいていた。最後にお会いしたのは、一昨年の夏、大阪の天保山で開催された「水木しげるの妖怪樂園」のオープニング・セレモニーのときであった。そのときはとても元気で、百歳まで生きるのだとおっしゃっておられたし、その後の様子を関係者からも折々にうかがっていたが、やはりお元気だということだったので、訃報に接したとき、信じられない思いであつた。

れた「水木しげるの妖怪樂園」のオープニング・セレモニーのときであつた。そのときはとても元氣で、百歳まで生きるのだとおっしゃつておられたし、その後の様子を関係者からも折々にうかがつていたが、やはりお元氣だということだったので、訃報に接したとき、信じられない思いであつ

## 木しげるさんを悼む

文化人類学者

小松 和彦



鬼太郎のオブジェと水木しげるさん（2003年）

# 現代の妖怪文化の先導者

さんは現代の妖怪文化の先導者であり体現者であつた。実際、日本人の多くは、妖怪といえば水木さんの描いた妖怪たちを思い浮かべるはずである。そして、水木

木さんの妖怪を通じて、日本の豊かな妖怪の世界へ、導かれたのである。

水木さんといえば、まさか想起するのは『ゲゲゲの鬼太郎』である。妖怪たちを

日 と らずのうちに、日本の妖怪画は、文化・妖怪画の伝統を継承するとともに、新たな妖怪画の創造者たち。柔らかいタッチで描かれた水木さんの妖怪画は、

分を客観的に眺めていたのだろう。水木さんが自分で好きだといい、私も好きな「ねずみ男」というキャラクターは、きっとそうしたまなざしから生み出され

異形の妖怪であつても、ゞ  
ことなく愛嬌があり、郷愁を漂わせており、親しみを感じずにはいられないはずである。

た、じつは水木さん自身の隠れた分身でもあつたのだ。  
現代妖怪文化のシンボルともいふべき水木さんを失

主人公にしたこのマンガでは、たくさんの種類の妖怪たちが登場する。その妖怪たちの多くは、民俗社会で伝えられていた妖怪や江戸の浮世絵師たちが描いた妖怪に素材を求めるながら、水木さんふうの妖怪として堪かれ、あるいは描き直されたりしたものであった。その意味では、水木さんは知らず知

印象に残っているのは、水木さんとお話をすると、さしあはりは自分自身を「は」ではなく、「水木さんは」と他人事のように話すことであつた。意識的に使い分けっていたのかどうかはわからぬ。だが、おそらくいつも頭のどこかで自

つたことは、とても悲しく  
辛い。しかし、水木さんが  
発掘し、私たちに示された  
豊かな日本の妖怪文化を、  
私たちがいつそう発展さ  
せ、世界に発信することが、  
きっとあの世に旅だった水  
木さんへの一番のはなむけ  
となるのではなかろうか。

日 と らずのうちに、日本の妖怪画は、文化・妖怪画の伝統を繼承するとともに、新たな妖怪画の創造者たち。柔らかいタッチで描かれた水木さんの妖怪画は、

分を客観的に眺めていたのだろう。水木さんが自分で好きだといい、私も好きな「ねずみ男」というキャラクターは、きっとそうしたまなざしから生み出され